■私の意見

医職住遊学のまちづくり

馬場　茂明
〈神戸大学名誉教授・WHO健康科学・技術政策諮問委員〉

「神戸っ子」四月号に生活文化の創造をテーマに「ファッションは衣食住遊」という座談会の記事が載っていた。神戸らしいセンスのある話題は、新しい神戸に熱い思いが、滲んでいた。私は、最近『医職住遊学のまちづくり』という本を書いたので一層興味をもって読ませて頂いた。阪神淡路大震災には、人間の生き方、思いやりのコミュニティ、地球環境との共生について多くのことを学んだ。あたかも震災前より世界保健機関（WHO）と厚生省は、健康な都市プロジェクトの施策を推進していたこともあって、大震災に遭って一層「まちづくり」への思いが強まったことも事実であった。人間の生活の基本は、いうまでもなく「衣食住」である。そこに心のゆとりと、生きる喜びの文化が生まれる。これが「衣食住遊」のファッションである。

近年、世界は人口の都市集中化、高齢化、地球環境の変化、経済格差の拡大、疾病構造の変化などがおこり、人間の健康問題が次世紀最大の課題となってきた。私は「衣食住」時代から健康文化の創造としての「医職住」の時代へ変わりつつあると感じると共に、遊びと、学びの文化をもつまちづくりが必要と考えるに至った。二十一世紀は、新しい生活哲理と最先端科学技術をもったまちづくりに全世界の知恵を集めねばならないと考えて、「医職住遊学のまちづくり」を提唱した。

神戸のまちづくりは、世界のモデルであり、人類の心と科学の実践でありたいと思うのは私一人だけでないと信ずる。

第21回 井植文化賞

受賞者発表

戦後、日本の復興と繁栄に大きな足跡を残した三洋電機株式会社の創設者、故・井植歳男氏の遺志により、昭和44年11月に「財団法人井植記念会」が設立されました。同会は、兵庫県在住、またはゆかりのある個人、あるいは団体で、それぞれの分野で目覚ましい活躍をされたり、多大な貢献をされた方（団体）の功績を讃え、地域社会のよりいっそうの発展に寄与したいと、昭和52年に「井植文化賞」を制定しました。

第21回のことしの6部門の受賞者は、選考の結果、次のとおりに決定しました。受賞者にはライオンのブロンズ像と、副賞として賞金（個人30万円、団体50万円）が贈られます。

■文化芸術部門

佐伯　敏光

〈小説〉

●選考委員

馬部貴司男
竹内　和夫
島　京子

■科学技術部門

水野　耕作

〈整形外科医〉

●選考委員

石山　靖夫
加藤征史郎
北村　新三
山本　節

■社会福祉部門
神戸新聞厚生事業団
〈理事長　池口善英〉

●選考委員
野上　文夫
津田　元
橋本　明

■地域活動部門
戸谷　松司
〈姫路市立美術館館長〉

●選考委員
小室　豊允
小笠原　暁
崎山　昌廣

■報道出版部門
山本　靖夫『イヌワシを追って』

●選考委員
宮本　和
中元　孝迪
向井　輝彦

■国際交流部門
古澤　峯子
〈神戸日豪協会副会長〉

●選考委員
新野幸次郎
宇都宮　浩
住野　和子

（敬称略）

主催・財団法人井植記念会

第21回 井植文化賞

～文化芸術部門～

震災体験を文学に昇華

佐伯　敏光

●選考委員
馬部貴司男〈作家〉
竹内　和夫〈作家〉
島　京子〈作家〉

佐伯敏光氏の受賞作品「活断層」は、高校登校拒否に始まる五年間の精神の自壊を経験した新聞配達青年が、被災地にたくましく生きる人たちとの出会いの中で内向していた言葉を表出させ、生きる活力を固めていく経過を追った長編小説である。

震災と登校拒否という一見不連続な二つの主題を、地殻と精神の断層として対置させ、被災地のドキュメントと青年の精神への深い探索を交錯させながら、確かなリアリティをもって書き切っている。その成功は作家としての力量もさることながら、日々、高校生たちとかかわっている一教師の誠実な熱い視線に貫かれているからであろう。時宜を得た秀作として推奨し、さらなる活躍を期待したい。

〈竹内和夫〉

自宅にて

■選考経過

候補作高宮謙「草原の八月」は敗戦時の旧満州吉林省における混乱を、義勇隊の少年の眼で描き、草原を逃避行する難民を襲うソ連兵の、略奪や暴行や殺りくの数日間がドキュメンタリータッチで展開されていく。**駒井妙子「桜は今年も咲いた」**は、老いの境地を描いたもので、全体に泣きも嘆きもなく淡々としていて、作者の力量を感じさせている。**佐伯敏光「活断層」**は、高校登校拒否の経験をもつ主人公が、被災地で逞しく生きるひとたちとの出会いで真の自己を発見するという長編小説（三六〇枚）。震災と登校拒否という二つのテーマを青年の自己回復という軸にからませ、しっかりと書いている。氏の「ヴァイキング」でのキャリアを併せて、受賞となった。

●受賞者メモリアル

1 河口龍夫〈現代美術〉
2 山田幸平〈作家〉
3 横井和子〈ピアニスト〉
4 荒木高子〈陶芸家〉
5 多田智満子〈詩人〉
6 田原富子〈ピアニスト〉
7 昇　外義〈画家〉
8 安水稔和〈詩人〉
9 延原武春〈指揮者〉
10 山沢栄子〈写真家〉
11 神戸灘ライオンズクラブ
12 青木はるみ〈詩人〉
13 今竹七郎〈グラフィックデザイナー〉
14 菅沼　潤〈演出家〉
15 宇江敏勝〈作家〉
16 光安義光〈建築家〉
17 大前　哲〈作曲家〉
18 鈴木　湊〈詩人〉
19 嶋本　昭三〈前衛美術〉
20 甲南高等学校貴志康一記念室

第21回 井植文化賞

～科学技術部門～

震災時の救急医療活動に尽力

水野　耕作

大震災では骨折や手足の麻痺、挫滅症候群など整形外科領域の外傷が多数発生しましたが、全力で治療に当たられ、巡回リハビリテーションチームを結成。各避難所をボランティアとして巡回し、二次的傷害の予防に努力されました。被災地での貴重な治療経験は学会において頻回に報告され、学会誌の他、報告書の記録にも残されていますが、この体験から神戸大学のみならず兵庫県の災害対策委員として活躍されました。

また、骨粗鬆症の治療に関する草分け的な研究者の一人であり、骨折の癒合課程など骨の病態を研究され、骨折部に発生する血腫の重要な働きを発見し、日本整形外科学会の特別奨励賞を受賞し、国際的にも評価されていらっしゃいます。

〈山本　節〉

●選考委員

石山　靖男〈神戸新聞メディア開発局長〉
加藤　征史郎〈神戸大学農学部長〉
北村　新三〈神戸大学工学部長〉
山本　節〈神戸大学医学部長〉

■選考経過

土木、情報などの様々な分野の研究が統合された「**都市安全研究センター**」のオープンや、西播磨の大型放射光施設「**スプリング8**」、さらに土木建築技術の粋を集めた**明石大橋開通**など、今後大規模なプロジェクトが目白押しの科学技術界。

そんな中、工学の分野では超精密加工技術専門でマイクロマシンの開発をしている**森脇俊道**が、また生物科学の分野では昆虫の脱皮ホルモンの合成と放出を誘導するホルモンの精製と放出機構に関する研究で注目されている**相薗泰生**が候補にあがった。

医学部門の**水野耕作**は整形外科医として震災時の救急医療活動に尽力し、災害救急医療への多大なる貢献が評価され、今回の受賞となった。

●受賞者メモリアル

1 櫻井春輔〈岩盤力学〉
2 杉山武敏〈遺伝子学〉
3 土田広信〈農芸化学〉
4 嶋田勝次〈都市計画・建築学〉
5 沢村誠志〈障害者の社会復帰〉
6 安藤四一〈音響の研究〉
7 辻　荘一〈家畜育種学〉
8 西塚泰美〈生理学〉
9 中岡睦雄〈パワーエレクトロニクス〉
10 清水　晃〈微生物生態学〉
11 岡田安弘〈脳機能生理学〉
12 賀谷伸幸〈計測工学〉
13 田中千賀子〈薬理学〉
14 安田武司〈熱帯有用植物学〉
15 廣畑和志〈整形外科学〉
16 神島安啓〈応用化学〉
17 加藤征史郎〈生殖生物学〉
18 天津睦雄〈耳鼻咽喉学〉
19 山本恵一〈電子工学〉
20 眞山滋志〈バイオテクノロジー〉

第21回 井植文化賞

～社会福祉部門～

戦後五十年・地域の福祉に貢献

神戸新聞厚生事業団

●選考委員
野上　文夫
〈神戸市看護大学副学長〉
津田　元
〈神戸新聞社常任監査役論説顧問〉
橋本　明
〈家庭養護促進協会事務局長〉

大戦で主要都市は焦土化し、街に戦災者や戦災孤児があふれる中で、神戸新聞厚生事業団は、これらの人々の生活を支援するため設立された。五十年を迎えようとした平成七年、あの阪神淡路大震災がまた都市を直撃した。事業団自身が被災しながら、素早く全国へたすけあい義援金を呼びかけ大きな成果をあげた。

事業団の五十年の歩みは、マスコミのパックを活かし、何回かの危機に際しては民間福祉活動の先導役を果たし、平時にあっては、そのアンテナ役、潤滑油的役割、世話役、また時に代弁者でもあったといえよう。まさに地域とともに「ささえあって五十年」の歩みであった。今後とも福祉推進の大きなささえとしてさらなる飛躍を期待したい。

〈野上文夫〉

第42回「なべの会」福祉団体・施設などが参加して盛況だったチャリティーバザー

■選考経過

社会福祉活動は地域に根ざした活動がほとんどを占める。やや広域的な活動を展開するコープこうべが推挙、今年五十周年を迎えた**神戸新聞厚生事業団**も推薦された。その他、**鈴木都（F・P・P）**の人形劇の活動が高く評価され、話題になった。

長田ケアホームの**中辻直行**の仮設住宅の支援活動は粘り強く続けられている。東灘たすけあいネットワークの**中村順子**の活動もめざましい。さらに、震災関係では、看護婦で活動に力を注ぐ**黒田裕子**の「西神第七仮設住宅から高齢者の孤独死は出さない」という心意気が披露された。

今年度は戦後の神戸の福祉厚生を大きく支えた神戸新聞厚生事業団に受賞が決まった。

●受賞者メモリアル

1 福来四郎
2 小畑廷子
3 神戸市立友生養護学校
4 春本幸子
5 富永繁男
6 神戸大学看護ボランティア
7 米田寛子
8 神戸東部地域入浴サービス実施委員会
9 涌井安太郎
10 山本博繁
11 エリア会　OHPこうべ
12 誕生日ありがとう運動
13 兵庫ボランティア協会
14 神戸いのちの電話
15 賀川記念館
16 点訳ボランティアグループ連絡会
17 KOBE在宅ケアボランティアグループほほえみ
18 楢崎茂登子
19 楽団あぶあぶあ
20 神戸ライフ・ケアー協会

第21回 井植文化賞

～地域活動部門～

姫路市の文化的街づくりに貢献

戸谷　松司

●選考委員
小笠原　暁
〈芦屋大学学長〉
小室　豊允
〈姫路獨協大学経済情報学部長〉
崎山　昌廣
〈神戸市立博物館副館長〉

姫路市は「播磨風土記」の頃より要塞の地で、灘の酒米「山田錦」をつくる肥沃な播州平野の中心に位置し、明治の初めには一時県都がおかれたこともあり、やがて軍都、戦後の経済成長期には工業都市として栄えた。播磨の文化風土は、柳田国男、三木清、和辻哲郎などを輩出するほど豊かであるが、天下一の国宝姫路城があるためか、都市の文化装置といえるものは少なかった。

兵庫県副知事から姫路市長に就任した戸谷松司氏は、橘川真一氏、伊藤誠氏などをブレーンとして、姫路文学館、好古園、日本城郭研究センター、姫路獨協大学を創設。駅前通りをはじめとして、都市文化の向上に大いに貢献され、一九九五年に勇退後、現在は姫路市立美術館の館長を務めておられる。

〈小室豊允〉

姫路城周辺文化ゾーンの一翼を担う姫路文学館も戸谷氏が整備した文化施設のひとつ

■選考経過

地震から三年、西宮市の十大学が参加する**西宮学生ボランティア交流センター**、がんばろうKOBEの**堀内正美**、東灘の**中村順子**、**コープこうべ**のともしび財団の活動は、現在も震災当時のボランティア精神を守りながら続けられ、今回高い評価を得た。芸術的な地域活動としては、尼崎のピッコロシアター館長の**山根淑子**、アルカイックホール支配人の**岡本健一**、谷崎潤一郎旧邸復元活動の**たつみ都志**、アート・エイド神戸の**島田誠**、PHD協会の**草地賢一**、丹波古陶館などの文化施設づくりに貢献した篠山の**中西通**らが候補に挙がったが、最終的には、姫路の文化都市づくりに貢献した**戸谷松司**に決定した。

●受賞者メモリアル

1 城崎郡日高町
2 明石市民のコミュニティ活動
3 一宮町文化協会
4 尼崎郷土史研究会
5 尻池南部地区自治連合協議会
6 月刊神戸っ子
7 明延ふるさとづくりの会
8 KICS
9 丸山地区住民自治協議会
10 アンドレ・ブリューネ
11 神戸新聞文化センター
12 尼崎市演劇連絡協議会
13 プナを植える会
14 松島興治郎
15 山村留学制度
16 山村硝子株式会社
17 (社)淡路青年会議所
18 保健医療福祉ICカードシステム開発検討委員会
19 情報センター
20 洋菓子KOBE展

第21回 井植文化賞

～報道出版部門～

兵庫のイヌワシを追い、自然保護の原点に迫るドキュメント

『イヌワシを追って』

山本　靖夫

●選考委員
宮本　和
〈ラジオ関西社長〉
中元　孝迪
〈神戸新聞論説委員長〉
向井　輝彦
〈NHK神戸放送局局長〉

イヌワシは、鳥の王者である。周囲を圧する眼光、鋭い爪、弾丸のような飛翔。追随を許さぬパワーに人々は古来、畏敬の念を抱き続けた。だが、その生態が解明され始めたのはごく近年のことだ。

山本靖夫氏は、神戸新聞社のカメラマンとして、その初期から調査研究にかかわり、氷ノ山のイヌワシを中心に、険しい山中でナゾの営みを解き明かしてきた。二十七年にわたる濃密な活動を、退職を機に再整理し、書き下ろしたのが本書である。興味深い生態と、森の消滅で追い詰められ、絶滅の危機に瀕するイヌワシの実態が、貴重な写真と的確な表現で描かれている。イヌワシを通じて自然保護の原点を探る、得難いドキュメントである。　〈中元孝迪〉

雪山で取材中の山本靖夫さん

■選考経過

放送では、昨年に引き続きNHKテレビ「**復興97がんばろや阪神淡路**」が評価されたほか、日中の国際二元生放送AM神戸「**広東・神戸今日的流行歌**」の取り組みが注目を集めた。

出版では、中井久夫編「**1995年1月・神戸**」「**昨日のごとく**」、立木茂雄編「**ボランティアと市民社会**」、伊藤誠「**ひょうごの美術家たち**」、神戸新聞社会部「**ザ・仕事**」、山本靖夫「**イヌワシを追って**」、村上和子「**KOBE洋菓子物語**」、加藤隆久「**神道文化研究の諸相／敦盛の萩**」、神戸ファッション協会「**グルメシティー神戸**」などが候補に。

最終的に、山本靖夫「**イヌワシを追って**」の受賞が決まった。

●受賞者メモリアル

1 「あなたの愛の手を」
2 神戸空襲を記録する会
3 兵庫県学校厚生会／落合重信
4 サンテレビ「訪ねてみたい兵庫の手づくり」春木一夫
5 「兵庫探検」「兵庫史を歩く」
6 「兵庫県高齢者放送大学ラジオ講座」
「神戸の中堅150社」
7 神戸新聞淡路総局「淡路祭事記」
8 「神戸からこんにちは」
「天津からこんにちは」
9 神栄赳郷
10 「私たちの昭和史」
11 「バルモア病院日記」
12 スタジオTODAYホットに語ろう！
「収録港湾労働神戸港」
「ひょうご経済人100人」
13 「火輪の海」「メダルは笑顔に輝いた」
14 神戸新聞「ゴミ問題取材班」
15 「兵庫史を歩く」
16 「播磨学講座全四巻」
17 コウベ・ドラマ8
18 神戸新聞コラム「正平調」
19 「いのち結んで」三条社夫
20

第21回 井植文化賞

～国際交流部門～

長年にわたり日豪両国間の文化交流、人材育成に大きく貢献

神戸日豪協会副会長
古澤　峯子

●選考委員
新野　幸次郎
〈神戸大学名誉教授〉
宇都宮　浩
〈兵庫県総務部次長〉
住野　和子
〈神戸ＹＭＣＡクロスカルチュラルセンタープログラムディレクター〉

誰でもオーストラリアが好きだが、この人とその程度を競ってはならない。神戸日豪協会が設立されて二十五年間、日豪の若者達の交流一筋でやってこられたが、ご本人は両国間の文化の向上とか、経済の発展とかの気負いはない。只ひたすらに教育者としての使命感のようなものに駆られてここまで活動してこられたのではなかろうか。

高校生の交互交流、補助教員の派遣、スタディーツアーの実施、ワトルの会、ホームステイプログラム等例年おびただしい事業の他、時々ユースオーケストラの招致や訪豪プログラムも敢行される。このエネルギーはどこから来るのか。その答えは誰にも分からないし、本人も「ただ好きだから」。

〈新野幸次郎〉

戦後50年カウラの日本人墓地記念墓参。キャンベラの豪日協会が神戸の被災した高校生を招待

■選考経過

最近めざましい国際交流活動を展開している例として、日本初の国際二元生放送「広東・神戸　今日的流行歌」をスタートさせたＡＭ神戸ラジオ関西、映画発祥の地として市民団体が主導となり、被災地神戸に心の癒しをもたらした神戸一〇〇年映画祭が候補となったが、文化活動のユニークさを評価しつつ、今後の継続的活動を見守ることとなった。

続いて十五年前の太平洋学長会議を契機に、アジア太平洋理解のため学際的な研究活動や公開講座を提供し続けてきた汎太平洋フォーラム、日中友好のために意欲的に活動を行ってきた移情閣（孫中山記念館友の会）などが取り上げられたが、結局、日豪協会設立以来二十五年間の献身的な活動を讃えて、古澤峯子にエールを送ることとなった。

●受賞者メモリアル
1　加藤一郎〈神戸日独協会名誉会長・神戸大学名誉教授〉
2　神戸日本チリ協会
3　神戸ＹＭＣＡクロスカルチュラルセンター／留学生ホストファミリープログラム
4　ＣＨＩＣ
5　アルカディア協会
6　神戸ブータン友好協会
7　海星病院ボランティア・グループ
8　桑原泰業〈関西日印文化協会会長〉
9　ミニＦＭ局ＦＭわいわい
10　関西バングラデシュ・プロジェクト

COHNAN
KENSETSU

安心という品質。

人の気持ちを真ん中にして安心を建てる。
それが私たちが考える安心という品質です。
そして、総合エンジニアリング企業としての
私たちの答えのすべてがここにあります。

シェラビア東山台1番街

コーナン建設
KOBE OSAKA TOKYO

神戸 078-221-6293 大阪 06-456-4311 東京 03-3564-5711

ハバロフスク・ダンスアンサンブル歓迎パーティのご案内

ラーダスチ！（よろこび）

少年少女によるロシア・ハバロフスク少年少女民族ダンスアンサンブル「ラーダスチ」のメンバーが来神。
これを歓迎して神戸っ子倶楽部の皆さんを中心に、歓迎夕食パーティを開きます。

■

- 日　時　1997年8月26日（火）　午後6時～8時30分
- 会　場　神戸ミュージックアベニュー
  ＜中央区北野町2-3-22　TEL078-232-0651＞
- 会　費　一般　6,500円　子供4,500円
- 定　員　120名

■■

当夜は、ロシアからやって来たメンバー26名が出席。皆さんと一緒に食事や社交ダンスを楽しんだり、ロシアの歌や民族ダンスをご披露します。夏の夜のひとときを、ロシアの友人と楽しくお過ごし下さい。ご参加をお待ちしております。
ラーダスチ！

尚、お申し込みは8月20日迄に、往復ハガキにて下記までお願いします。
〒650 神戸市中央区下山手通3-1-18 ツインズトアビル4F
月刊神戸っ子「ラーダスチ」係
TEL078-331-2246　FAX078-331-2795

■■■

主催／月刊神戸っ子（小泉美喜子）
レストラン「カサブランカ」（打間奈津子）
ザ コウベライブ ソサエティ（中西健二）
兵庫県日本ロシア協会（中田善司）

地域文化論

〈その204〉

「城ヶ島の雨」に想う

板東　慧（さとし）
〈大阪産業大学教授〉

全国を旅する機会が多いが、大きな観光地や仕事上の機会の多い地域以外は繰り返して行くことは少ない。時に、かつて印象のよかった場所がその後どうなっているかな、と思って、久しぶりに訪れることがある。そのような地域は、二〇年以上は経っていることが多いので、行って見てその変貌に驚かされることがしばしばある。住んでいる神戸の中でもそんなことがあるのだから、久しぶりに行く地域がそうなのは当然かも知れないが、変貌の仕方にさまざまあり、結果として好ましいものとそうでないものがある。この十数年、どこでも地域文化のアイデンティティを強調する道具立てに努力をし、それなりに面白くなってきているし、それで地域振興やその土地の人々の暮らしが支えられているので、外部からあまり無責任なこともいえないとは思う。それにしても、もともとのイメージとの落差が気になることはある。この種の体験は多いが、つい最近経験した一例をあげる。

三浦三崎である。かつては京浜急行・三浦海岸駅が終点で、海岸に沿ってかなりの距離があったが、今は三崎口まで電車も延び、その間はマンションや新しい戸建て住宅がひしめくニュータウンとなり、三崎口から三崎までバスで十分ばかり商店街が続く。かつては、白秋の詩で有名な城ヶ島との間に渡船があり、魚介採りの船遊びなどを楽しめたが、今や大橋ができて、両側の海岸が埋め立てられ、巨大な冷凍倉庫群が林立している。明治末期に、白秋が「城ヶ島の雨」を詩作した有名な旅館に泊まった。その頃は波打ち際にあったこの宿は、関東大震災で海辺の土地が隆起し、海との間には道路になる程度の幅ができた。しかし、その後も、与謝野夫妻・斉藤茂吉はじめ作家や著名人がよく泊まって、筆をとったり向かいに見える城ヶ島の眺めを楽しんだという。かつて、二十数年前もこの界隈はそのような風情があったと記憶している。ところが、現在はさらに埋め立てられて、魚市場の巨大な冷凍倉庫群をへだてた道路際に何の変哲もなくある。泊まってみれば、さすがに団体向きでないだけにひなびたムードとサービスを感じるし、予約すればさまざまなマグロ料理にありつける。しかし、城ケ島に渡ってみても、やはり冷凍倉庫が林立し、白秋の想いとは程遠い感がする。

ただし、ここに圧巻がある。一つは、三崎の西岸の岩場で見る富士と落日の光景で、これは絶景である。もう一つは、魚市場の日曜朝市である。朝六時頃から、兜・目玉・大トロ・中トロ・カマなど、あらゆるマグロが、市価の半値かそれ以下で数十という屋台店に並べられ、東京方面からも車で多くの買出し客がくるし、即席料理もある。釣り人とマグロ目当てが「城ケ島」の眺めを吹っ飛ばした感がある。これもまた好しというべきか。

三浦三崎西岸より見る落日の富士

酔眼流旅日記 第14回

ベトナム青春旅行（七）

村松 友視〈作家〉

アメリカ軍関係の建物の一室が、南ベトナム民族解放戦線のゲリラによって爆破され、そのゲリラが外へ逃げ出した。追いかけた米兵が、ゲリラが逃げた方向へ銃弾を撃ちつづけた。すると、すぐ隣のホテルの窓から顔を出した米兵が、下へ向って銃を撃った。ゲリラはとっくに姿をくらましていたが、誰もいないところへ向けた銃弾が、いつまでも空しい音をひびかせていた……私がサイゴンへ行く数日前、そんなことがあったとある新聞記者から聞いた。

誰もいないところへ銃弾の雨を降らせるというこの場面に、ベトナム戦争とアメリカ兵の構図があらわれている。アメリカ兵は、見えない敵におびえながらベトナムで戦っていたのだった。

サイゴン川に、いくつものほてい葵が流れているのを見たが、そのほてい葵のひとつひとつにも、それをカムフラージュの道具にしたゲリラの影を見なければならなかったにちがいない。そんな彼らが、帰国したのち、心の空洞を埋める術もなく、人生を破綻させていくのを描く映画がいくつかあったが、それは、無理もないなりゆきなのだろう。

米兵は、サイゴンの酒場でリズム・アンド・ブルースに乗って踊り狂い、その酒場の女性たちはサイゴン・ティを糧に家族たちを養っている。そして、いつ吹っ飛ぶかもしれない生活を、サイゴンの人々は日常の時間として受け入れざるを得ない。だが、彼らの表情には、翳りや暗さよりも、この現実の中で生き抜こうというエネルギーがあらわれていた。

これらの人間たちを見たとき、私の中で何かが切り換った。私は、中央公論社という出版社の「婦人公論」編集部員という身分だった。そんな私の中には、いく分かのジャーナリスト精神というやつがあって、サイゴンへやって来たにちがいない。仕事でもなく頼まれたわけでもないのに、暮れと正月の休暇をつかって、"戦場の街"へやって来たのだから、ベトナム戦争の中での自分の役割を見つけようという構えが、どこかにあったはずなのだ。

署名運動、デモ、カンパといった形式の中で、自分は戦争に反対しているのだという自覚は、もちろんもてなかった。だから、せめて危険な場所に身をおいて、ベトナム戦争と自分の接点を見つけようとしていたはずなのだ。その物腰は、やはりジャーナリストとしてのものだった、

カット／灘本唯人
題字／筆者

だが、実際にサイゴンの地を足で踏みしめてからの時間が、そのジャーナリスト精神を徐々に溶かしていった。

サイゴンへ行っている新聞記者たちの様子を見ても、あまり心を動かされなかった。戦場の街で取材をするジャーナリスト……というイメージを抱いていたが、現実は少しばかり様子がちがった。午前中に米軍司令部の発表を録音し、それをもとに東京の本社へ打電すると、あとはプールで泳いだり、各社集ってのマージャンに耽ったりというぐあいで、何人かの特殊な記者を除いては、どこか鋭さに欠ける印象を与えられた。

私は、しだいにベトナム戦争とは何かというテーマや、ベトナム戦争を終結する条件を模索する感覚や、南ベトナム民族解放戦線に仮託する気分などが、軀の中で徐々に溶けてゆくのを感じた。

そして、その戦場に送り込まれた米兵の一人ひとりや、戦場の街を日常生活の場とするサイゴンの人々の表情に、強い興味を抱きはじめた。つまり、戦争の意味を探るよりも、そこに生きる人間の表情に関心をもったということであり、私の座標軸がジャーナリストの側から作家の側へと切り換ったということだった。したがって、私の作家としての視線が芽生えたのは、あの一九六六年の暮れから一九六七年の正月にかけての、サイゴンの旅だったのである。

〈むらまつ・ともみ〉一九四〇年東京生まれ。慶応義塾大学文学部卒。六三年中央公論社に入社。「小説中央公論」「婦人公論」「海」編集部員を経て、八一年退社。八二年「時代屋の女房」で直木賞受賞。主な著書は『私、プロレスの味方です』『百合子さんは何色』『アブサン物語』『トニー谷、ざんす』

夏の夜語り
編集長インタビュー

どん底でももうあかんわと思わずに

笑福亭鶴瓶〈落語家〉

昭和五十三年から続く、神戸風月堂地下ホールでの「もとまち寄席・恋雅亭」。神戸の寄席文化を支える催しとして神戸っ子にはお馴染みだ。六月十日、この日のトリをつとめた笑福亭鶴瓶さんに編集長がインタビュー。「恋雅亭」やその前身「柳笑亭」をプロデュースした楠本喬章さんや松鶴師匠の思い出話から始まり、復興へ向かう神戸へのメッセージまで、楽しい夏の夜語りとなりました。

笑福亭鶴瓶（しょうふくてい・つるべ）1951年生まれ。京都産業大学中退。1972年、六代目笑福亭松鶴の許に入門。テレビ「笑っていいとも」「鶴瓶・上岡パペポTV」「ざこば・鶴瓶らくごのご」などに出演中。

★もとまち恋雅亭と松鶴師匠、楠本喬章先生のこと

―「恋雅亭」にはよく出ていらっしゃったんですか。

鶴瓶　僕の師匠（笑福亭松鶴）が、笑クリエート社の楠本喬章さんとはすごく懇意にしていただいていたんです。師匠が先に亡くなってからは、楠本先生を師匠みたいに思っていましたから、亡くなられたときは一番ショックを受けました。だから、逆に僕みたいなんが今夜みたいに恋雅亭

6月10日、恋雅亭のトリを務めた鶴瓶師匠。「神戸っ子さん、いまのうちに写真とってや」。派手な動きで観客を沸かせる

でトリを務めるいうのは、天国で怒ってはるんとちがうかなと思います。

―そういう年頃になられたということですよね。

鶴瓶　そうですね。もう二十五年もやっていますから。でも僕は中入り後すぐにやるかぶりが好きなんです。かぶりは座を華やかにする感じですから。

―トリは重たいですからね。

鶴瓶　全部やり通した後ですから、あっさり仕上げたほうがいいんですけどね。僕を見に来ていただいている方もあるので、両方の思いもあってちょっと長く普通のしゃべりもせないかんし。そんなことに気を遣わずにやれる前の方が好きですね。

―楠本さんが兵庫区で開いた「柳笑亭」の頃に入門されたんですか。

鶴瓶　昭和四十七年です。あの頃に入門した、文福とか福三、小松、小軽、仁福というメンバーで、「楠々（クスクス）の会」というのを九十四年に白鶴さんの蔵で第一回をやらしてもらったんです。その後すぐに震災で蔵がつぶれてしまって、今年ようやく蔵が復活したので、十月十二日にまた「楠々の会」をやるんです。

―「楠々の会」というのは良い名前ですね。

鶴瓶　楠本先生は本当に欲得抜きにやっておられたんで、なんとか先生の名前を残したかったんです。

―楠本さん無しでは、神戸の落語は根差さなかったですからね。

創業100周年の神戸凰月堂本店

鶴瓶　落語というのは、いまいろんな形で商売になるんですけど、その商売ではない基盤を本当に落語を愛する気持ちで作られた。震災があって、凰月堂の「恋雅亭」も落語のマニアだけでない一般の方にも来られるようになりました。震災は大変なことでしたけれども、それをバネにしている所があります。

—明るく生きたいという気持ちが強かったでしょうからね。一時は笑ったらいけないという雰囲気がありましたからね。

★松鶴師匠の追っかけから弟子入りへ

—鶴瓶さんもヘアスタイルで年齢が変わってこられたようですね。

鶴瓶　三十をきっかけに髪を切ったんです。大学の落研の頃から髪は長かったんですが。僕らの頃は落研がブームだったんです。僕は浪速高校のときに落研を作ったんです。

—本当にはしりのころですね。

鶴瓶　そうですね。仁鶴、三枝の頃です。仁鶴の影響はすごく受けていますね。だから、仁鶴の師匠のところに行きたいという思いがあったけれども、松鶴は知らなかったんです。たまたま浪速高校の裏手には三代目、春団治師匠の家があって、アルバイト先の近くに松鶴の家があって、何となくの縁があったんですけど、意識はなかったですね。それが、京都の市民寄席でやってはる噺を聞いて、すごいおもしろい人やなと思ったんです。それから、人物の部分に興味をもって松鶴の追っかけをしたんです。それで金平の会といって、米朝師匠がやってはる会で「あの坊さんの頭見ていたら、ネタ忘れてしもたからオチ言うて降ります」と言って高座から降りてしまいよったんです。なんちゅう人や、ものすごいなあと思ったんです。だから、落語ということより人物のほうから入りましたね。

—なんか分かる気がしますね。

鶴瓶　好きな顔とか好きな雰囲気とかあるじゃないですか。

—それですよね。

鶴瓶　松鶴というのは、好きな雰囲気の顔なんですよ。

—独特やもんね。むかし、神戸の新開地で寄席があってみんな出てはったんですよね。

鶴瓶　松竹座ですね。僕が入門して二年目になくなったんです。よく師匠について行っていましたし、ザ・パンダの向こうを張って、うちの会社が売れないかんと僕と松枝兄さんと松喬（当時・角三）と三人で、三色すみれを作れと言われた。僕はひと月くらいイヤでイヤでたまらなかった。なんか組まされることがイヤだった。そんなんに組まされるのは似合わないんですね。そういうのでたくさん松竹座には出ていました。

—いい小屋が次々につぶれて、柳笑亭のあの時代から元町になったんですね。

鶴瓶　もう二十年は過ぎましたね。僕は柳笑亭でスタートして、下足もしていましたし、「つばす会」は全然のお客が入らなかった。さんまもあそこに出ているんですよ。

—いまをときめく人たちが、出ていたんですね。

鶴瓶　僕なんかは、つばす会という手作りの小屋で育ったし、師匠が手作りの会をやっていたから、どうしても手作りの小屋を作りたいという気持ちがあるんです。

—あのときで九十人くらいの小屋でしたね。

鶴瓶　九十人も入ったらいっぱいの小屋に百人くらい入っていて、消防署が来て消防法に引っ掛かると言っていたそうです。メンバーがいい時は入るし、そうでなかったらお客は来ない。お客さんというのは身勝手なものだけど、メンバー関係無しに入ってもらいたい。隣の文房具屋、牛乳屋も買って、その辺を全部柳笑亭にしたい、というテープが残っているんです。

―松鶴師匠らしいですね。

舞台から降りても気さくな鶴瓶さん

★つっかけ履きのお客さんを寄び込みたい

―鶴瓶さんのファンは女性が多いですね。

鶴瓶　ファンという言い方はあまり好きやないんです。同類というか仲間という感覚がありますね。自分がそんなに世間に認知されていないときから、僕を応援してくれている人たちというのは、なんか嬉しいですね。二十年近くずっと見て来てくれている訳ですから。逆に自分を応援してくれたことに、間違いはなかったという思いを持ってもらいたいという気持ちはあるんです。ああこの人を応援していて良かったねと思ってもらいたい。逆にファンになられると照れるみたいな感覚はありますね。

―一緒に育つというか、そういうことかもしれないですね。柳笑亭から恋雅寄席になり、出ていた人たちも育っていくというのは嬉しいものですね。

鶴瓶　誰かが突出するというのではなく、落語家全体が育っていって欲しいですね。落語家は、小屋だけに固執してしまってマニアックなファンだけを相手にする人が多い。師匠は違った。その辺のつっかけ履きのお客さんがどれだけ寄席に入れるかを目標にやってはった。通りがかりに、鶴瓶と書いてあるポスターを見て、なんとなく寄席に入ってくる。そういう形が、師匠が一番望んだ形です。

―娯楽として庶民が喜んで行く、大衆性のある場でなければならないですからね。

鶴瓶　自分を笑ってもらおうではなくて、全体のバランスを見ないとだめなんですね。僕はマスコミに出てしまっているから、派手なんですね。だけど僕には師匠がずっとやってきていた寄席への思いがある。僕ら、噺家は師匠についてそこから学ばないと意味がないんです。

―そういう姿勢を学ぶんですね。

鶴瓶　弟子が名前をもらったら、もう舞い上がって千社札を作って貼ったりしている。そんなことはどうでもいいんです。名前は勝手に一人歩きして人が育ててくれるもので

すから。その場は受けても長続きしない。精神がちゃんとしていて初めて長続きする。

—それが本物ですよね。そういう気持ちが嬉しいですね。また、テレビはテレビでおもしろいでしょう。テレビにも鶴瓶の魅力がある。

★松鶴師匠のむちゃくちゃな人生に憧れて

鶴瓶　テレビを否定する人もいますけど、テレビほど難しいものはない。寄席は二百人くらいのお客さんです。落語会は総合のものですから、前がお腹いっぱいだったら軽目にやるとかできるんです。ところが、テレビというのは二千万人が見ている。どう操るか。大変なんです。

—馬力が要りますよね。

鶴瓶　だから、さんまはすごいんですよ。簡単にビートたけしはどうとか、タモリはどうとか批評するけどそんなものじゃない。僕らはそばで感じながら、こんなんずっと勝たれへんと思いながらやっている。チャンネルひねればいつも出ている、二千万人の人に愛されている人といっしょに出ていないと落語界はだめになる。特殊な世界だけにこもっていてはだめなんです。

米之助師匠が手紙で「ちりすべ」を教えてくれた

—みんなに受けるテレビだけに出る人が多いけれど、落語も両方やるということが大事ですね。手作りもあり、マスのものもやる。仁鶴に憧れたというのはラジオですか、落語だったんですか。

鶴瓶　ラジオとか落語というより、そのときのムードですからね。それに憧れて来ていますから、いまでも仁鶴に会うとあがりますよ。ふだんの真面目な仁鶴を兄弟子として知っていても、いまだに何を見てもおもしろいですね。だから、逆に、仁鶴のところに弟子に入らなくてよかったと思いますね。

—でも、もともとの持ち味は仁鶴というより松鶴だから、良かったんではないですか。

鶴瓶　師匠に弟子入りしてますからそうなるんでしょうね。憧れるのは仁鶴ですけど、人生に憧れるのは松鶴ですね。むちゃくちゃな人生ですからね。

—むちゃくちゃできて幸せですね。

鶴瓶　月に一回、墓参りに行くんですけど、なんかあそこに行くと落ち着きますね。子供のころは、なんで墓参りなんかするんやと思っていたんです。石のところに行って何をするんや。でも、一カ月行けないときがあると、イライラして行かないとだめだと思いますよね。

—やっぱり霊が呼ぶんですね。師匠の魂に会いに行ってはるんですね。行ったらこころが休まるんでしょう。

鶴瓶　行かないと怒られるような気がする。そんなんする人間やなかったんですけどね。だから、元町「恋雅亭」でトリをするとあがるんですよ。ずーっとかぶりをやりたいなと思います。もういっぺん初心に返れと言われているみたいですけど、どうしようと思います。

—楠本さんや師匠の霊にやらされている部分があるんやろうね。トリぐらいになってくると天命みたいなところがある。自分がやるというより、与えられる場という感じでしょうね。

★芸よりも血を教えないとだめ

鶴瓶　こんど竹園で落語会をやるのにネタを何にしようか考えていて「子はかすがい」をすることにした。師匠の「子はかすがい」がすごく好きだったんで、テープを聞いていた。そしたら「しりすべ一本盗んだことないねんぞ」と言ってるんです。「しりすべ」って何のことか分からない。どこに聞いても分からなくて、困り果てて米之助師匠に電話したらそれは松鶴が歯が抜けていたからそう聞こえたけど「ちりすべ」や。全国的な言葉で言えば「わらしべ」で、上方落語集の第五巻に出ているから。って即答なんです。しかも、僕が上方落語集を持っていなかったらとわざわざコピーしたものに説明をつけて手紙をくれはった。これが噺家の精神なんです。七十歳過ぎているお師匠はんは、落語ということに取り組んでいる僕に、すぐこれだけの思いをかけてくれはる。そういう精神を継承できているかどうか分からないけれど、噺家になってよかったなあと思います。

―その辺が伝統芸の素晴らしさですね。そういうものをもらって、みんな今もやっているということが大事だし、鶴瓶さん自身も幸せですよね。

鶴瓶　だから、しょうもない弟子を作ったらいかんのです。

―いい話ですね。これが日本の文化の伝統が流れていく道なんでしょうね。

鶴瓶　これがほかの芸にない血なんです。だから、芸より血を教えないとだめなんです。芸は本人が作るものなんです。芸は人なりと言いますけど、その人なりの人柄が出ていれば、それは稚拙なものであっても認められるんです。本当に自分自身にそういう心があったら、それで感動してもらえる。「子はかすがい」をやるこいつをどうにかうまくやらしてやろうという、米之助師匠の心。

―それは、芸をやっている同志の感覚でしょうね。

鶴瓶　ぼくにとって、さんまは同志なんです。ライバルは同じ大学で音楽をやっていながら、あっというまに大きくなった、あのねのね。あいつらはすごい。いまも全然変わらへんし、消えていない。

―何とも思わんと、気取らんといけるのは関西人の強味やろうね。

鶴瓶　歴史のないものやから軽視されるけれど、とんでもない。何もなかったものを作り上げるほどすごいことはない。日本人はすぐ、伝統とか文化がすごいと思ってしまうんですけど、個人がつくりあげたものは、周りが安易に認めないからすごいと思う。

―オリジナリティやからねえ。伝統芸としての良さとオリジナルの良さ、どっちもあるから。

鶴瓶　伝統の中であぐらをかいている噺家は多い。もっと自分自身を磨いていかないといけない。

―そこの切磋琢磨はむつかしい。でも鶴瓶さんの場合は、あのねのねと競いながらやって来た部分があったから、落語の世界でもいろんなことができるんではないですか。

鶴瓶　そうかもしれませんが、ぽさぽさの頭をして、音楽とかをやっていた僕のすべてを認めてくれたのが師匠です。あの頭で見せたほうがこいつはおもしろいと思ってくれるものがある。自分でも不思議や思っていたんです。オリジナリティを認めてくれる師匠であった。

―いい師匠にめぐりあいましたね。

鶴瓶　それと吉本興業という怪物みたいな大きなものがあったから、いまでもこうやっていろんなところに挑戦していけるというところがあります。

―神戸の人たちに何かメッセージがありましたら。

鶴瓶　一番弱いいまが、一番自分の強さがわかるときだから、どんなどん底でも、もうあかんわと思わずにいて欲しいです。

〈6月10日「くりや」で〉

恐怖のエッセイ ―――― 団六・夏の夜噺

怖いものづくし

露の団六〈落語家〉

夏である。夏の夜は怖い。何となく怖い。子供は夏休みで夜更かしをしている。大人はそれをよいことに酒の勢いであることないこと怖い話をやりまくり、テレビでは四谷怪談、落語家は怪談噺、と、怖い話のオンパレードである。

お蔭で子供たちは一人で便所に行けなくなったものである。

私が子供の頃、家の前は、町の共同墓地であった。私の父方も母方もここに眠っている。で、あるからして、墓に対する恐怖はなかった。もちろん幽霊も怖くはなかった。

時々幽霊を見た、と、いう噂が流れてきたこともあるが、それは戦死した誰某であるとか、あの場所やったらあの人ちゃうか、会いたかったなあ、とか、とぼけた大人の会話を聞いていたせいでもあるだろう。我々もお盆の日には、お供えのバナナを如何にして蟻より早く食べるか、しか考えていなかった、ように思う。それよりも、大人の作り出す、足の親指がしゃべり出す話とか、便所から手が出てくる話のほうが怖かった。

我々は、家の便所に行くのに親を起こし、夜中、親が寝静まってからバナナやら、りんごやらを狙って墓場に行っていたのであった。こっちのほうが恐いと思う。

同じことを、墓場に住み着いていた、通称、タコのおっさんも思っていたようであった。近所の大人の話によると、このオッサンは戦後間もなくこの墓場に、年老いた爺ちゃんとともに住み着いたらしく、私が物心着いた頃には、管理人のようになっていて、線香やら、蝋燭やら、を売っていた。

お供えのりんごを取ろうと手を伸ばすと、墓石の後ろからおっさんの顔が出てきて「こらあ、なにしとんねん」と、言う顔は怖いとかいうものではなかった。命からがら逃げ出した我々があとで墓場へ行くと、りんごもバナナも消えていた。おっさんは我々のライバルでもあったのである。

昼間、我々は墓場で蝶々を採っていた。網の中にアゲハ蝶を入れるのと、我々の頭に強烈なパンチが飛ぶ

露の団六（つゆの・だんろく）1958年生まれ。1982年神戸大学教育学部卒業。在学中に「もとまち寄席・恋雅亭」で露の五郎の噺を聞き入門を決意、落語家となる。AM神戸「露の団六のニュース大通り」のキャスターとしても活躍中。

のがほぼ同時であった。そこにはおっさんの血走った顔があり、震える唇からは、微かに「蝶々殺すな」と、聞こえてきた。「わいらを殺すな」と、言ったつもりだったが、聞こえてなかったと思う。これは、怖かった。

しばらくして、爺ちゃんは呆けてきた。毎日のようにオネショをし、丸裸にされて、おっさんにたたかれていた。夜中の二時三時に「ヒー、ヒー」と、聞こえてきた。これも怖かった。

そして、ある日おっさんがいなくなった。怖くはなくなったが、何となくおっさんを心配してしまった。ほかにどこで生きていけるねん、このことのほうが怖い。

墓の南側には、阪神電車が通っている。ある日、ブレーキのつぶれた自転車に乗って、鉄条網付きの柵に突っ込んだ。血まみれになった私は、気丈にも家に帰り、保険証を持って、病院へ行き、三十分ほど順番を待って、八針ほど縫ってもらった。と、いうより、それだけ縫うのがやっとだった、らしい。そこらぢゅう血だらけだったらしいが、だれも何も騒がず、全く普段通りの待合室だったそうである。これも怖い。

中一のとき、蓄膿と中耳炎を同時に患い、この病院に通ったことがある。同じ先生が、行く度に、鼻をかめ、と言ったり、鼻だけはかむな、と言ったり、うろうろしたことがある。

同一人物だとは思われていなかったようである。やっぱり怖い。

線路の南には小学校があった。どこにでもある、二宮金次郎さんが、実は漫画の本を読んでいる、という噂があった。そんなあほな、と、思っていた。尊徳さんの像は、当時、教室から手の届く近さにあり、休み時間が終わって授業が始まると、尊徳さんの手の上には天才バカボンとか、魔法使いサリーが乗っていたのである。これは恐くなかった。

中二の夏、十四歳の時、転校した。怖かった。勉強が分からん、教科書は進み過ぎ、女の子が可愛い。あだ名が違う、さきっぺ、もっちゃん、ミサ、である。本名である。

我々は違う。ぶた、へこき虫、かに。本名はない。見たまま。したまま、である。

あの時、縁あってまた、元の区に暮らしていた。小学校も中学校も破壊され、墓石も倒壊した。三十六才にして生まれ育った街に泣きながら立ちすくんだ私の目に入ったのは、仁王立ちして子供の手を引いている、へこきむし。「しっかりせんかいな」

眩しかった。そして、その向こうには、がにまた、そばかす、ふろしき、がんぺき、こおろぎ、サンフラワー、すやき。

と、おったらほんまに怖かったやろなあ。みんなごめん。

日本タウン誌協会共同企画
編集長
おすすめの旅
その2

兵庫県・播磨科学公園都市

八月より『まちびらき』のイベント『SPring-8』の完成を記念して

「上郡民報」編集長　山本　修

世界一の大型放射光施設「SPring-8」

兵庫県の西、播磨平野の中心に姫路城がある。その美しい姿は白壁からの連想で白鷺城とも呼ばれる。さきごろ世界文化遺産に登録され、姫路城はもちろん、城を擁する姫路市も世界中にその名が知られた。

この姫路市の西北西約二十五キロの丘陵地に、十一年前から播磨科学公園都市が兵庫県の事業で建設されている。約七百四十ヘクタールの用地に小・中・高・大学の教育機関や企業研究所、研究支援センター、住宅、生活関連施設などがととのった。昼間人口三千人。活気ある街の全体像が見えてきた。

なかでも中心施設となる『大型放射光施設・スプリング・エイト』は試運転を終え、本年十月に供用が開始される予定である。日本原子力研究所と理化学研究所の共同チームが建設し、欧米の同種施設より世界最大の規模を誇る。

八十億電子ボルト（八GeV）の電圧で加速された電子は、約千五百メートルの円周をもつ加速器内を光に近い速さで走る。電磁石でこの軌道を曲げると、光は電子から離れてまっすぐ進む。これを放射光という。

本年三月二十六日に発生に成功した放射光は、基礎科学の研究を大きく飛躍させる『夢の光』といわれる放射光を利用して蛋白質の構造と働きの仕組みや、物質の性質を見極めることができる。「非常に明るい」「とても細く絞られた」「波長範囲の広い」光で、これまで見ることのできなかった分子・原子のミクロな世界を覗くことができる。

仮説をたてて実証するのに十年もかかっていた物質構造の研究が、この放射光を利用すると数時間で解明できる。いわば「星空の下での研究だったのが、太陽の下での研究」になる。医学から地球科学までその利用は広範にわたる。『科学公園都市』は世界の科学界でいま一番ホットな場所として注目されている。

この施設の完成記念と新都市のさらなる発展を目指し、本年八月一日から十月末まで『まち

夜間、美しく彩られるセンターサークルの疑岩

のためのサイエンスセミナー（八月十八・十九日）など。

オートキャンプ（八月）、こども「光の城」建設大作戦（八月中旬三日間）、熱気球大会（十月）など。常設の「はりま・夢サイエンス館」は、二つの円形建物を筒でつないだ鉄アレイの形をしたパビリオンで、小学高学年以上に『科学する心』を育む参加・体験型の施設。『発見と創造の喜び』をコンセプトに、科学の不思議と驚きを提供する。

また、オプトピア（広報コーナー☎0795・8・1155）に予約しておくと、『スプリング・エイト』蓄積リングの一部を二階見学室から見ることができる。世界の科学界をリードする施設なので見ておきたい。

イベントに参加するとともに、自然と調和した街を探険するのもおもしろい。播磨科学公園都市は電線を埋設し、看板の設置も規制するなど、都市景観（アーバンデザイン）を重視している。中央交差点の周辺はストーンランタンを中心に、直径約二百五十メートルにわたってアメリカ人のアーバンデザイナーによる斬新な設計の公園がある。磯崎新氏や安藤忠雄氏設計の建物もユニークで楽しめる。

新都市やスプリングエイト、まちびらきイベントに関するさらに詳しい情報は次のインターネットホームページを参考にしてください。

■兵庫県
http://web.pref.hyogo.jp/harimacompe/
■スプリングエイト
http://www.spring8.or.jp/
■上郡町
http://www.sci.himeji-tech.ac.jp/kinrin/kamigori/index-j.html
■姫路工業大学理学部
http://www.sci.himeji-tech.ac.jp/index-j.html
◎交通ガイド
山陽新幹線・相生駅およびJR山陽線・上郡駅よりバス各30分。山陽自動車道・龍野西ICおよび中国自動車道・佐用ICより各20分。
その他お問い合わせは上郡民報社へ☎0795・2・0101

びらき』のイベントがある。

八月一日、セレモニーのあとパレードやパフォーマンスで開幕。海外の科学者も参加する国際会議や講演会など五回。野外コンサート（八月五日＝スピード・MAXなど）、ロボットランド（八月下旬）やソーラーカーフェスタ（九月下旬）、日本宇宙少年団兵庫国際ジャンボリー（八月六日～九日）、高校生

※「編集長おすすめの旅」は、日本タウン誌協会（事務局・月刊神戸っ子）の会員五十誌の各編集長が順番に執筆。随時、掲載します。